

明治・大正の三宮神社と境内の賑わい

荒尾親成

明治七年五月、神戸―大阪間に国鉄が開通した時、いち早く三ノ宮駅（いまの元町駅のところ）が設けられたことによっても生田

神社の裔神（まごがみ）八社（一ノ宮―八ノ宮のうちでは全国的に知られ、とりわけ神戸市民に最も馴染みの深いお宮!!ご祭神の天照皇太神の御子湍津姫命（たきつひめのみこと）は、古来航海の安全と商工業の繁栄を守り給う神さまとして神戸にはうってつけの神さま。ここ中心に現在のセンター街も繁昌した感が深い。

筆者が神戸にきた明治四十年から大正末年までの記憶をたどっても、そのころの三宮神社境内は西の新開地と対抗する盛り場の感があった。

三宮神社への道すがら楽しかった。私がいつも通って行く道は小野中道通りを通過して滝道の広い踏切りを渡り、三宮本通りへはいると（現在センター街二丁目）先ず目につくのが阪本の洋食（現在錦のところ）、その山側に狐のよめ入りの大きな看板をあげた福井家具店（現在ユーハイムコンフレクト）、嬉しかったのは「製紙場のぜんざいうまいよ」とよく食べに寄った小山ぜんざい（現イナハラ）。南手に大きな製紙場があったのでそう呼ばれた。

更に西へ行くと甘党の香月、その東側にアーチ形のトンネルがあつて、その奥に東横の芸者置屋があり、キレイどころが箱屋の男衆を連れて左棲で歩いているのに会ったし、大西の下駄

屋、井上金物、長沢の文房具、大西呉服染屋などが商売を張っておられた。

生田筋を浜へ折れ、東側の山新うどん屋を見ながら煉瓦小路へはいると、いよいよ三宮神社の賑わいが伝わってくる。

境内には万国館（のち寄席になったこともある）世界館（のち御代遊座、落語の寄席、また三宮キネマ）三宮倶楽部という活動小屋があり（何れも明治末年から大正元年に誕生）歌舞伎座（明治二十四年朝日座、同三十二年一月焼失、同年十二月改名再建）という芝居小屋、雑居亭という浪曲定席があつていずれも大繁昌していた。

殊にこの時代、お正月三ヶ日の賑わいは、たいしたものので、爆竹を売る店（南京町から中国服を着た人が出張してきていた）ポップン、竹ごま、のぞきからくり、見世物小屋も出て、いちばん子供食欲をそそったのがサザエの壺焼き、プーンと鼻にくるとたまらなく食欲をそそり、これ喰べて「ナンテ、マがいいんでしょ」と流行歌に合せるシャレタ子供もいた。夏場の納涼のそぞろ歩きを当てこんだ境内の賑わいも盛んで植木市、氷店、アイスクリーム屋さん、足立袋物屋さん、歌舞伎座裏で、氷とアイスクリーム屋さん、早替りして、一晚の売り上げがなんと百円（いまの百万円）と噂され人々を驚かせた。

明治四十二年春、本殿北裏に三階建て出来た三宮勸商場（商品



陳列館は、いまの百貨店の前身を思わせる雑居ビルさながらの商店街で、夏場には、この屋上で早くも大正初年にビヤガーデンを開いていた。星空を仰いで、屋根のない物干し場を思わせる階段を登ってゆくと、それでもアサヒビールの提灯が

ビール、洋食、氷金時とナカナカ近代的な商売をしていた。

とくに印象に残っている想い出は、この勧商場の入口右手に瓦斯会社直営のカフェー「ガス」が大正二、三年の頃もう誕生したことで、五銭のコーヒを注文しても砂糖壺が各テーブルに出されていて、砂糖お好みによって入れ放題の豊楽振り、いたづらな子は、コーヒを半分飲み、また砂糖をたっぷり入れてカップ一杯マケマケにして飲んでいた。いつもキレイなウェートレスが白いエプロンをタスキにかけ、帳場のあたりからはその頃流行の松井須磨子のカチューシャの唄やゴンドラの唄、さては誰れかの蛮声に近い声で「お前とならばドコまでも、日光のケゴンの滝の中までもトコ、イトヤセン、カマヤセン!!」が蓄音機からフンダンに流れ興をそそった。この店は忽ち名物店に

なり、当時の神戸の文化人の巢のようなかたちになっていた。

筆者の子供のころ、三宮境内で印象に残っていることをあげると、活動小屋三宮倶楽部西のアンマキ屋の二銭のアンマキのうまかったこと、神社西入口のホーラクでギンナンと椎ノ実を煎ってアツアツのを売っていたオバサンのこと、大正四、五年のころ新聞社主催の活弁サン人気投票で、世界館の島津鷺城が新開地勢をおさえて最高得点で優勝したこと、三等入選、万国館秋山実弁士が前説の挨拶で首を横にお辞儀する癖があるのでカニとアダ名されて人気があったこと、歌舞伎座で天勝の奇術桃中軒雲右衛門の浪花節、松浪義雄、和歌浦糸子（初代大江美智子養父母）の金色夜叉を見たり聞いたりしたこと。

お正月を迎えるに当っては社家の宮司さん（清水家）の家へ神宮大麻お礼を暮れの三十日に毎年貰いに行っていたこと、この先代のお母さん勢以女史が日露開戦に当り金壺万円也（いま一億円の価値）を警察に持って行き、ボンと戦費にお使い下さいと投げ出し、天晴れ大和撫子振りを発揮!!ために本殿横に立派な石造顕彰碑（位置を替えて現存している）が建てられていたこと、古来三宮神社境内からコンコンと真清水が湧き、代々宮司さんが世襲で清水姓を名乗っておられること等、想い出は尽きるところを知らない。

戦後都市計画のため境内はひどく縮小されたが、この賑わいは今日のセンター街の賑わいにつながったような気がしてならない。

（郷土史家）